西田文学読書会（第26回）　　2023.8.26（13：40～16：00）

　　村上春樹「かいつぶり」

　岡部・佐野・渡辺・楯谷・奈原・大藤・田中・本田

佐野＝「かたつむり」日本のカタツムリは食べられないが

渡り鳥、そこらにいる

答えのない者を探求していく感じにマッチする

ドアを探し、ドアを開けようとする、言葉で開けようとする＝合言葉＝違った言葉でも通ってしまう＝15分の遅刻＝そこから新しい世界が開けてしまう

楯谷＝「かぶとえび」（幼生）たべられない？

　　心を探求＝夢の中で地下室、トンネルを抜ける＝門番がいる＝無意識を通り抜けていく

最後の章が謎、嘘から出た誠、雇ってもらえるかどうかは分からない、繋がっているか、繋がっていないかもわからない。

渡辺＝村上春樹の作品として考えてしまう＝ストーリーだけ読むとコントのような面白さ＝最後の章が落ちになっている＝門番と主人公の掛け合い（コント）＝感じだけ

大藤＝門番の立ち位置＝教育実習と学童保育の自分にそっくり＝上の人に言われているから駄目、目の前にいる相手は通してくれと押し切るという対立関係

　後半は不思議だなあ＝問と問題と答えがずれていく過程＝コントっぽい

奈原＝仕事探して、仕事にありつく話。読んで、なんで働かなければならないかという印象を受けた＝働かなければならない強迫観念とそういう実態もある＝貧乏な生活にはうんざり＝貧乏な境遇のわびしさ＝現実的にはとてもいやな仕事探し＝食っていくためには合言葉＝社会生活をするための（悪い意味での）コミュニケーション（場所の論理に従い、空気を読む必要がある）

形而上学的…、死について考えた＝シュールな人生

岩波新書『村上春樹は　むずかしい』＝「かいつぶり」を読んで難しいと感じた

今迄はいろんなイマジネーションが湧いてきた

これは全くイメージが湧かない

　これまでの作品とは全く異質

100㌫の女の子＝哲学的な思想のモデル

吸血鬼＝輸入物のお化けの詮索＝恐ろしくない

楯谷＝私も違うと思う＝女性が出てこない（主人公の男の自分だけの内面的表現）異質なものとの対面、関係を問題にしない

佐野＝「女の子」を削除したところに自己自身の問題に集中させることになった。

読みやすい小説＝自分自身の関心を投影しやすい＝一度「わからなくなること」が必要

渡辺＝他の小説と違うとは言えない＝吸血鬼＝会話の中で話の次元がずれていく

大藤＝楯谷さんの意見に納得、

今迄の小説＝「どんな世界に生きとんや？」

違う世界同士がぶつかって少しずつずれていく

本田＝自分の内面にもぐっていくのは共感

　自分の選んだように世界が成り立っていく話

　他者（他人）ではなくて周りの世界との関わりの話

　基本的に同じだが、女性が出てこない

楯谷＝言葉でむりやり開けようとするのはその通りだが、合言葉を知らなくても開いてしまう

　合言葉と同じようなやつが奥にいた

　門番にごり押しをすること自体が言葉で開ける事にあたる

　なぜ門番は取り次いだのかが疑問

　なぜこんな格好で出て来るのか、この時間に風呂に入っているのがおかしい

　道順も違うし、

　お膳立てに乗っていくのでなく、無理やりこじ開けていく実感があるのかも？

　夢で出て来るからこそリアルだ。うまくいかないこともあがいているうちになんとかなる。夢と現実の深い所で呼応。

佐野＝言葉しかないのだが、それでまた次の世界でも課題にぶつかる、その連続だ。

奈原＝出口の分からなくなる夢を自分は見る＝トンネル、階段、

工場の中に入って生産工程を巡りながら、出ようと思っているのだが、出られない。建物の中に入って、出ようと思ってどちらにどういっても出られない。そうこうするうちに目が覚める。答えがあるとか、夢と現実が一致することがない。

　なんらかの「答え」が出るという小説なのか？

　「窓」では答えがいっぱいあった。マルチバース

　外に出られない＝答えがない、

旅行支援のクーポンが使えない＝システムの出来が悪い＝答えが出ない恐怖

楯谷＝答えが出る＝後になって考えたら答えが出ていたということで、実際に手に入れてみたら「答え」のはずの者は予想とは全く違うものだろうが、

奥にかいつぶりがいる

偶然に見つけたものを幸運に変える。研究していて思いもよらない発見に出会うこと。「瓢箪から駒」

この場合後にならなければ、「駒」かどうかも分からない。

本田＝Ｔ字路でコインを投げて決める。コイン➡右？　道順通りに行くと、同じところ戻る？　左に行っても同じ階段にたどり着く。どっちに行っても人生は同じところにたどり着く。

大藤＝生きるのが嫌になって来た。個人的関係でなく、自分と世界の関係。主人公が世界を壊していく話。システムがこれが答えだと言っているを主人公が壊していく。暗証番号ならそれ以外が認められない。これは人と人との会話なので、答えがずれる余地がある。答えが無効かされる。出口でない出口を作って行く。その連続かなあ、次々に新しい洞窟に行き着くだけで、それが続くだけというのは、いやだなあ、疲れるなあと感じる。

佐野＝常にこの門番はいる。それは違うと言ってくる。

大藤＝その都度答えを出していく。

【『村上春樹全作品』版】

かいつぶり　　　　　　　　　　　　村上春樹

157

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がどこまでもまっすぐに続いていた。とても長い廊下だった。天井がいやに高いせいで、それは廊下というよりは干上がった排水溝みたいに見えた。そこには装飾と呼べるようなものは何ひとつなかった。きわめて即物的な廊下だった。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたっぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光はいろんなひどい目にあわされた末にやっとここまで辿り着いたのだとでもいわんばかりに不均一で、疲弊してた。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらさえきちんとは見えない。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然Ｔ字路のまんなかに立っていた。

Ｔ字路？

僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにドアがあります」葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリ158ートの壁で、 コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、比喩的なドアも、まるで何もない。僕は手のひらで壁をずっと触ってみた。しかしそれはただのつるりとした壁だった。

　これはたぶん何かの間違いにちがいない。

僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したものか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワーの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやっとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のボーナス、夏の長期休暇。ドアがひとつみあたらなかったくらいで、はいそうですかと簡単にあきらめるわけにはいかないのだ。ドアがみつからないなら、みつかるまでどこまでも前進するのみだ。

僕はポケットから十円玉を出して軽く宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、 一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいに冷やりとして奇妙な密度があった。僕は給料のことを考え、エア・コンディショナーのきいた気持の良いオフィスのことを考えた。仕事があるというのはいいものだ。僕は歩調を速めて廊下を前に前にと歩いていった。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくに159つれて少しずつドアの体裁を帯び始め、 ついには一枚のドアになった。

僕は一度咳払いしてからドアを軽くノックし、一歩下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一歩下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しずつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようと足を踏みだしかけたところでドアが音もなく開いた。まるでどこかから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは22というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとにはちょっと申し訳なさそうな微笑を浮かべていた。悪い人間ではないようだった。

「すみませんね、ちょうど風呂に入っていたものですから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。

「規則なんですよ。僕らは昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけないんです」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいなんだけど」と僕は言い訳した。

160「ふむふむ」と彼は肯いてから僕に葉書を返した。「ここで働くことになってるわけですね」

「そうです」と僕は言った。

「私は新規採用については何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみましょう。私の仕事はドアを開けて、上の人に取り次ぐっていうことだけですから」

「お願いします」

「ところで合言葉は？」

「合言葉？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「聞いた覚えはありませんね」

「それは弱ったな。実はね、合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われてるんですよ」

僕は合言葉がどうこうなんて話はまったく聞いていなかった。もう一度葉書をひっぱり出してみたが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きっと書き忘れたんだと思うな」と僕は言った。「ここに来るまでの道の案内もちょっと違っていたしね。とにかく上の人に取り次いでもらえませんか。そうすればわかると思うから。僕は採用されて今日からここで働くことになっているんですよ。上の人に訊いてもらえれば、そういう指示が出ていることがきっとわかると思うんですよ」

「いや、だから、そうするには合言葉が必要なんですよ」彼はそう言ってポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の煙草を一本さしだし、ライターで火を点けてやった。161

「あ、どうもすみませんね。それで、なにかその……、合言葉らしいものは思い出せないですか？」

無理な相談だった。聞いたことも見たこともない合言葉なんてそう急に思いつけるものじゃない。僕は首を振った。

「私だってこういう七面倒臭いことが好きなわけじゃないんだけどね、まあ上の人には上の人の考えがあるんでしょうね。わかるでしょ？　上の人がどんな人か私は知らないし、会ったこともありませんよ。でもほら、そういう人って、いろんなことを思いつきでやるんですよ。個人的に取らないでくださいよね」

「ええそれはまあ」

「私の前にこの仕事やってたやつもさ、合言葉をど忘れしたっていう客を気の毒に思って一人取り次いだだけでクビになっちゃったんですよ。即刻クビですよ。明日より出社するに及ばず、てなもんです。あなたもご存じなように、今どき良い仕事をみつけるのは大変ですものね」

僕は肯いた。「ねえ、どうでしょう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは規則で禁じられてるんですよ」

「ほんの少しでいいんだけど」

「でも、もし何かの拍子にばれちゃったら面倒なことになるしな」

「僕は黙ってる。あなたも黙ってる。わかりっこないじゃないですか」と僕は言った。僕だってこのことに関してはすごく真剣なのだ。簡単には引っ込めない。

男はしばらく迷ってから、小さい声で僕に耳打ちした。「いいですか、とても簡単なことばで、水に関係があります。手のひらに入るけれど、食べることはできない」

今度は僕が考えこむ番だった。

「最初のことばは？」

162「か」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言ってみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまいね。悪いと思うけど、私だって危険を冒して規則を破ってやってるわけだから。いつまでもいつまでもあてっこしているわけにいかないんです」

「チャンスをもらえたことについてはとても感謝してますよ」と僕は言った。「でももう少しだけヒントがもらえるとありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

男はむずかしい顔をした。「そのぶんじゃ、いまにそっくり教えてくれって言いだすんじゃないんですか？」

「まさかそんな」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれればいいんです」

「五文字」と彼はあきらめたようにため息をついた。「まったく親父が言ったとおりだよ。一度他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐まで結ばされる、てね」

「すみませんね」と僕は言った。

「とにかく五文字だ」

「水に関係があって、手のひらに入るけれど食べることはできない」

「そのとおり」

「そしてで始まる五文字のことば」

「そうです」

僕はそれについてじっと考えた。

163「かいつぶり」と僕は言った。

「だってかいつぶりは食えるでしょう」

「本当に？」

「たぶんね。美味くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。「私は鳥のことなんて何も知りませんよ。東京の町中で育ったんです。山手線の駅なら全部順番に言えます。でもかいつぶりなんて見たこともありません。それがどんな格好をした鳥かも知りませんよ」

　僕だってかいつぶりなんて生まれてこのかた一度も見たことがない。でも僕はで始まる五文字の動物なんてかいつぶりしか思いつけなかったのだ。その「かいつぶり」ということばがはっと反射的に僕の頭に浮かんだのだ。

「かいつぶり」と僕は言い張った。僕はきっぱりとそう言った。「手のりかいつぶりはおそろしく不味いから犬だって食べない」

「ねえねえ、ちょっと待ってくださいよ」と彼は言った。「あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんですよ。理屈はともかく違うものは違うんです」

「でもかいつぶりは水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ。ちゃんと合ってるでしょう」

「でもあんたの理屈は間違ってるよ」

「どこが？」

164「だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「そんなもの存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放った。「かいつぶり以外に水に関係があって、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるんですよ、ちゃんと」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないですか」

「でもその……手のりかいつぶりを食べるのが好きな犬がどこかにいるかもしれないでしょうが」

「じゃあそれはどこにいるどんな犬なのか、具体的な例証を示してほしい」

「うーん」と彼は唸った。

「僕は犬のことならなんでも知ってるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味いんですか？」と彼は気弱そうな声で訊いた。

「それはもうおそろしく不味い」

「あんたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして僕がわざわざ食べなくちゃいけないんだろう？」

「そりゃまあそうですね」

「とにかく上の人に取り次いでくれませんか」と僕はきっぱりとした声で言った。「かいつぶり」

165「しかたないな」と彼は言った。そしてもう一度タオルで髪を拭いた。「一応取り次いでみますよ。まあ無理だとは思いますけどねえ」

「ありがとう。恩にきるよ」と僕は言った。

「でも手のりかいつぶりなんて本当にいるんですか？」

「きっとどこかにいるさ」と僕は言った。でもどうしてまたなんてものを急に思いついたのだろう？

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。また歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。世界はろくでもないことでみちている。歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ、目を閉じて、死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった。かいつぶりはこのところよく死について考えた。自分が死んで永遠に眠っている光景を頭の中に描くのだ。

手のりかいつぶりここに眠る。墓石にはそう刻んであった。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械に向けて不機嫌な声で怒鳴った。

「お客です」と門番の声がした。「今日からここで仕事をするんだそうです。合言葉も言いました」

手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」

5349字

【講談社文庫版】

かいつぶり　　　　　　　　　　　村上春樹

175

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がまっすぐに続いていた。天井がいやに高いせいか、廊下は干上がった排水溝みたいに見えた。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたっぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光はこまかい網でもくぐり抜けてきたように不均一だった。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらを眺めるのも一苦労という有様だ。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然T字路のまんなかに立っていた。

T字路？

僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。

176

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにドアがあります」、葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリートの壁で、 コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、的なドアも、まるで何もない。

やれやれ。

僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したものか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワーの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやっとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のボーナス、夏の長177期休暇。ドアのひとつ、曲がり角のひとつくらいであきらめる手はない。

僕は靴の底で煙草を踏み消してから十円玉を宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、 一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいにとしていた。僕は金のことを考え、エア・コンディショナーのきいた気持の良いオフィスのことを考え、素敵な女の子のことを考えながら歩き続けた。一枚のドアにりつきさえすればそんな何もかもを手にすることができるのだ。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくにつれて少しずつドアの体裁を帯び始め、 ついには一枚のドアになった。

ドア、なんという素晴らしい響きだ。

僕は一度いしてからドアを軽くノックし、一歩下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一歩下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しずつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようと足を踏みだしかけたところでドア178が音もなく開いた。まるでどこかから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは22というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとには人の良さそうな微笑を浮かべていた。

「ごめんよ、風呂に入っていたものだから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。

「規則なんだ。昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけない」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいだけど」と僕は言い訳した。

179「ふむふむ」と彼はいてから僕に葉書を返した。「ここで働くことになってるんだね」

「そう」と僕は言った。

「俺は何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみるよ」

「ありがとう」

「ところで合言葉は？」

「合言葉？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「何も……」

「それは弱ったな。合言葉がないと誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われてるんだよね」

僕はもう一度葉書をひっぱり出してみたが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きっと書き忘れたんだね」と僕は言った。

「とにかく上の人に取り次いでもらえないかな」

「だから、そのためには合言葉がいるんだよ」彼はそう言ってポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の180煙草を一本差しだし、ライターで火をけてやった。

「悪いな……、それで、何かその……、合言葉らしいものは思い出せない？」

無理な相談だった。合言葉なんて思いつきもしない。僕は首を振った。

「俺もこういうしち面倒臭いことが好きなわけじゃないんだけどさ、まあ上の人には上の人の考えがあるんだろうしね。わかるだろ？」

「わかるよ」

「俺の前にこの仕事やってたやつもさ、合言葉を忘れたっていう客を一人取り次いだだけでクビになっちゃったんだよ。今どき良い仕事は少ないからね」

僕はいた。「ねえ、どうだろう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは禁じられてるんだ」

「ほんの少しでいいんだよ」

「でも、どこかに隠しマイクがあるかもしれない」

「そうかな」

男はしばらく迷ってから、小さい声で僕に耳打ちした。「いいかい、とても簡単なことばで、水に関係があるんだ。手のひらに入るけれど、食べることはできない」

181　今度は僕が考えこむ番だった。

「最初のことばは？」

「」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言ってみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまいだよ。悪いとは思うけど、俺だって危険を冒して規則を破ってやってるわけだからね」

「感謝してるよ」と僕は言った。「でももう少しヒントがもらえるとありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

「いまにそっくり教えてくれって言いだすんじゃないのか？」

「まさか」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれるだけでいいんだよ」

「五文字」と彼はあきらめたように言った。「が言ったとおりだよ」

「親父？」

「親父がよく言ってたよ。他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐を結ばされる、てさ」

「なるほど」と僕は言った。

182「とにかく五文字だ」

「水に関係があって、手のひらに入るけれど食べることはできない」

「そのとおり」

「」と僕は言った。

「は食えるよ」

「本当に？」

「たぶんね。くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。

「かいつぶり」と僕は言い張った。「手のりかいつぶりはとてもいから犬も食べない」

「まてよ」と彼は言った。「だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんだ」

「でも水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ」

「あんたの理屈は間違ってる」

「どこが？」

184「だって合言葉はじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放った。「以外に水に関係があって、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるんだよ」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないか」

「でもその……手のりが好きな犬がどこかにいるかもしれない」

「どこにいる？ そしてどんな犬だい？」

「うーん」と彼はった。

「僕は犬のことならなんでも知ってるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味いのかい？」

185「おそろしく不味い」

「あんたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして食べなくちゃいけないんだ？」

「そりゃまあそうだな」

「とにかく上の人に取り次いでくれないかな」と僕はきっぱりと言った。「」

「しかたないな」と彼は言った。「一応取り次いでみるよ。無理だとは思うけどさ」

「ありがとう。恩にきるよ」と僕は言った。

「でも手のりなんて本当にいるのかい？」

「いるさ」

手のりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。歯医者、確定申告、車の月賦、 エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かだった。

186　手のりここに眠る。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりは機械にむけてどなった。

「お客です」と門番の声がした。

手のりは腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」

4106字

【全作品版】

かいつぶり　　　　　　　　　　　村上春樹

157

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がどこまでもまっすぐに続いていた。とても長い廊下だった。天井がいやに高いせい~~か~~で、それは廊下というよりは干上がった排水溝みたいに見えた。そこには装飾と呼べるようなものは何ひとつなかった。きわめて即物的な廊下だった。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたっぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光は~~こまかい網でもくぐり抜けてきたように~~いろんなひどい目にあわされた末にやっとここまで辿り着いたのだとでもいわんばかりに不均一~~だった~~で、疲弊してた。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひら~~を眺めるのも一苦労という有様だ~~さえきちんとは見えない。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然Ｔ字路のまんなかに立っていた。

Ｔ字路？

僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにドアがあります」~~、~~葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリ158ートの壁で、 コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、比喩的なドアも、まるで何もない。僕は手のひらで壁をずっと触ってみ　た。しかしそれはただのつるりとした壁だった。

　これはたぶん何かの間違いにちがいない。

~~やれやれ。~~

僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したものか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワーの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやっとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のボーナス、夏の長期休暇。ドア~~の~~がひとつみあたらなかったくらいで、~~曲がり角のひとつくらいで~~はいそうですかと簡単にあきらめるわけには~~手はない~~いかないのだ。ドアがみつからないなら、みつかるまでどこまでも前進するのみだ。

僕は~~靴の底で煙草を踏み消してから~~ポケットから十円玉を出して軽く宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、 一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいに冷やりとして~~いた~~奇妙な密度があった。僕は~~金~~給料のことを考え、エア・コンディショナーのきいた気持の良いオフィスのことを考えた。~~素敵な女の子のことを考えながら歩き続けた。~~仕事があるというのはいいものだ。~~一枚のドアに辿りつきさえすればそんな何もかもを手にすることができるのだ。~~僕は歩調を速めて廊下を前に前にと歩いていった。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくに159つれて少しずつドアの体裁を帯び始め、 ついには一枚のドアになった。

~~ドア、なんという素晴らしい響きだ。~~

僕は一度咳払いしてからドアを軽くノックし、一歩下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一歩下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しずつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようと足を踏みだしかけたところでドアが音もなく開いた。まるでどこかから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは22というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとには~~人の良さ~~ちょっと申し訳なさそうな微笑を浮かべていた。悪い人間ではないようだった。

「~~ごめんよ~~すみませんね、ちょうど風呂に入っていたもの~~だ~~ですから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。

「規則なん~~だ~~ですよ。僕らは昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけないんです」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいなんだけど」と僕は言い訳した。

160「ふむふむ」と彼は肯いてから僕に葉書を返した。「ここで働くことになってる~~んだね~~わけですね」

「そうです」と僕は言った。

「~~俺~~私は新規採用については何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみ~~るよ~~ましょう。私の仕事はドアを開けて、上の人に取り次ぐっていうことだけですから」

「~~ありがとう~~お願いします」

「ところで合言葉は？」

「合言葉？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「~~何も……~~聞いた覚えはありませんね」

「それは弱ったな。実はね、合言葉~~がないと~~を知らない人間は誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われてるん~~だよね~~ですよ」

僕は合言葉がどうこうなんて話はまったく聞いていなかった。もう一度葉書をひっぱり出してみたが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きっと書き忘れたん~~だね~~だと思うな」と僕は言った。「ここに来るまでの道の案内もちょっと違っていたしね。とにかく上の人に取り次いでもらえ~~ないかな~~ませんか。そうすればわかると思うから。僕は採用されて今日からここで働くことになっているんですよ。上の人に訊いてもらえれば、そういう指示が出ていることがきっとわかると思うんですよ」

「いや、だから、~~そのため~~そうするには合言葉が~~いるんだよ~~必要なんですよ」彼はそう言ってポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の煙草を一本さしだし、ライターで火を点けてやった。161

「~~悪いな……、~~あ、どうもすみませんね。それで、なにかその……、合言葉らしいものは思い出せないですか？」

無理な相談だった。聞いたことも見たこともない合言葉なんてそう急に思いつ~~きもし~~けるものじゃない。僕は首を振った。

「~~俺も~~私だってこういう七面倒臭いことが好きなわけじゃないんだけど~~さ~~ね、まあ上の人には上の人の考えがあるん~~だろうし~~でしょうね。わかる~~だろ~~でしょ？　上の人がどんな人か私は知らないし、会ったこともありませんよ。でもほら、そういう人って、いろんなことを思いつきでやるんですよ。個人的に取らないでくださいよね」

「~~わかるよ~~ええそれはまあ」

「~~俺~~私の前にこの仕事やってたやつもさ、合言葉をど忘れしたっていう客を気の毒に思って一人取り次いだだけでクビになっちゃったん~~だ~~ですよ。即刻クビですよ。明日より出社するに及ばず、てなもんです。あなたもご存じなように、今どき良い仕事をみつけるのは~~少ないから~~大変ですものね」

僕は肯いた。「ねえ、どう~~だろう~~でしょう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは規則で禁じられてるん~~だ~~ですよ」

「ほんの少しでいいん~~だよ~~だけど」

「でも、~~どこかに隠しマイクがあるかもしれない~~もし何かの拍子にばれちゃったら面倒なことになるしな」

「~~そうかな~~僕は黙ってる。あなたも黙ってる。わかりっこないじゃないですか」と僕は言った。僕だってこのことに関してはすごく真剣なのだ。簡単には引っ込めない。

男はしばらく迷ってから、小さい声で僕に耳打ちした。「いい~~かい~~ですか、とても簡単なことばで、水に関係があ~~るんだ~~ります。手のひらに入るけれど、食べることはできない」

今度は僕が考えこむ番だった。

「最初のことばは？」

162「か」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言ってみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまい~~だよ~~ね。悪いと~~は~~思うけど、~~俺~~私だって危険を冒して規則を破ってやってるわけだから~~ね~~。いつまでもいつまでもあてっこしているわけにいかないんです」

「チャンスをもらえたことについてはとても感謝して~~る~~ますよ」と僕は言った。「でももう少しだけヒントがもらえるとありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

男はむずかしい顔をした。「そのぶんじゃ、いまにそっくり教えてくれって言いだすんじゃない~~の~~んですか？」

「まさかそんな」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれ~~るだけでいいんだよ~~ればいいんです」

「五文字」と彼はあきらめたように~~言った~~ため息をついた。「まったく親父が言ったとおりだよ。一度~~」~~

~~「親父？」~~

~~「親父がよく言ってたよ。~~他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐~~を~~まで結ばされる、て~~さ~~ね」

「~~なるほど~~すみませんね」と僕は言った。

「とにかく五文字だ」

「水に関係があって、手のひらに入るけれど食べることはできない」

「そのとおり」

「そしてで始まる五文字のことば」

「そうです」

僕はそれについてじっと考えた。

163「かいつぶり」と僕は言った。

「だってかいつぶりは食える~~よ~~でしょう」

「本当に？」

「たぶんね。美味くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。「私は鳥のことなんて何も知りませんよ。東京の町中で育ったんです。山手線の駅なら全部順番に言えます。でもかいつぶりなんて見たこともありません。それがどんな格好をした鳥かも知りませんよ」

　僕だってかいつぶりなんて生まれてこのかた一度も見たことがない。でも僕はで始まる五文字の動物なんてかいつぶりしか思いつけなかったのだ。その「かいつぶり」ということばがはっと反射的に僕の頭に浮かんだのだ。

「かいつぶり」と僕は言い張った。僕はきっぱりとそう言った。「手のりかいつぶりは~~とても~~おそろしく不味いから犬~~も~~だって食べない」

「~~まてよ~~ねえねえ、ちょっと待ってくださいよ」と彼は言った。「あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないん~~だ~~ですよ。理屈はともかく違うものは違うんです」

「でもかいつぶりは水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ。ちゃんと合ってるでしょう」

「でもあんたの理屈は間違ってるよ」

「どこが？」

164「だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「そんなもの存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放った。「かいつぶり以外に水に関係があって、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるん~~だ~~ですよ、ちゃんと」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないですか」

「でもその……手のりかいつぶりを食べるのが好きな犬がどこかにいるかもしれないでしょうが」

「じゃあそれはどこにいる~~？ そして~~どんな犬~~だい？~~なのか、具体的な例証を示してほしい」

「うーん」と彼は唸った。

「僕は犬のことならなんでも知ってるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味い~~のかい~~んですか？」と彼は気弱そうな声で訊いた。

「それはもうおそろしく不味い」

「あんたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして僕がわざわざ食べなくちゃいけないんだろう？」

「そりゃまあそう~~だな~~ですね」

「とにかく上の人に取り次いでくれ~~ないかな~~ませんか」と僕はきっぱりとした声で言った。「かいつぶり」

165「しかたないな」と彼は言った。そしてもう一度タオルで髪を拭いた。「一応取り次いでみ~~る~~ますよ。まあ無理だとは思~~うけどさ~~いますけどねえ」

「ありがとう。恩にきるよ」と僕は言った。

「でも手のりかいつぶりなんて本当にいる~~のかい~~んですか？」

「きっとどこかにいるさ」と僕は言った。でもどうしてまたなんてものを急に思いついたのだろう？

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。また歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。世界はろくでもないことでみちている。歯医者、確定申告、車の月賦、 エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ、目を閉じて、死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった。かいつぶりはこのところよく死について考えた。自分が死んで永遠に眠っている光景を頭の中に描くのだ。

手のりかいつぶりここに眠る。墓石にはそう刻んであった。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械に向けて不機嫌な声で怒鳴った。

「お客です」と門番の声がした。「今日からここで仕事をするんだそうです。合言葉も言いました」

手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」